

い山岳家獨有の色、死のやうな寂莫から誘ひこまれて見せらばた魔界の黄な灯火、私はただく其刹那が描きたいのです、その一瞬に感じ得た色彩をその儘畫に現はしたいのです、私は氣分を尊びます、氣分の畫が欲しいのです、ただ圖の構へや色がすぐ塗つてあるのは望みではありません、畫を通して筆者その時のムードが觀る者の胸に應えさへすれば私は満足します。

私に畫が描けたらば、私は終末に至つて此自問を自答します、私は氣分の畫が描きたいのです。

●美術審査委員

文部省開設の第六回美術展覽會出品の美術審査委員は廿一日左の如く仰付けられたり

▲第二部(西洋畫) 醫學博士文學博士森林太郎(主任)、黒田清輝、男爵岩村透、松岡壽、久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作、鹿子木孟郎、吉田博、中村不折、中澤弘光、山本森之助、小山正太郎、中川八郎

▲第三部(彫刻) 高村光雲(主任)、石川光明、竹内久一、白井保二郎、長沼守敬、新海竹太郎、大熊氏廣、米原雲海、山崎朝雲、

青木繁氏の畫を見た時

矢代 幸雄

忘れもしない、彌生廿六日の午后赤城君と後藤君と、それから僕とは、東台の花を外に、此人の繪を見に行たのであつた。新聞や雜誌で、天死したる天才であると聞いた丈、僕は其他に何も青木氏に就て知らなかつたから、別に特殊な期待を持たず漫然誘はれたを幸ひに、ポカンと來たまでであつた。そして、僕は駭いてしまふのであつた。

西洋畫家の日本畫と云ふ嚴かめしい名の下に、コマ畫を擴げた様な、人を馬鹿にした、ぞんざいな代物に、賣れそうな安價をぶらさげて、目まぐるしきまで遠慮會釋なく曝して居る廊を廻つて行くと、此度は新歸朝者の作品。多少、呼吸を吹返して田舎者の東京見物の様にキョク、して進むと、最後の暗い室に：：僕は思はず身顫ひをして、軀が硬くなつてしまつた。胸には亂調子の動悸までして、動くのが厭になつた。

今迄喋つて居た僕も、口をきけなくなつた。赤城君は元來黙つてる男である。皆んなは別々になつて、各が向き／＼に繪を眺めた。

噫青木君。如何なれば、君は斯くまで眞面目であつたか。輕佻浮薄、滔々として世に漲り、人或は世に媚び、阿諛物に戀々身世を忘れて、感激の赴く儘に、突進踴躍す可き藝術界すら、勸工場然たる展覽會に、手頃な賣れそうな畫計り列べる世の中